

I	哲学の区分について	7
II	哲学一般の領域について	11
III	哲学の二部門を一箇の全体へと結合する手段としての判断力批判について	14
IV	ア・プリオリに立法的な能力としての判断力について	18
V	自然の形式的合目的性の原理は判断力の超越論的原理である	21
VI	快の感情が自然の合目的性の概念と結合していることについて	28
VII	自然の合目的性の直感的表象について	32
VIII	自然の合目的性の論理的表象について	37
IX	悟性の立法と理性の立法との、判断力をつうじた結合について	40
I	一箇の体系としての哲学について	45
	註解	47
II	哲学の根底に存する、上級認識能力の体系について	52
III	人間のこころのいっさいの能力の体系について	56
IV	判断力に対する一箇の体系としての経験について	59
V	反省的判断力について	62
VI	それぞれ特殊な体系をなす自然形式の合目的性について	69
VII	自然の技術という理念の根拠としての判断力の技術について	71

VIII 判定能力の感性論について 74

註解 80

IX 目的論的判定について 88

X 技術的判断力の原理の探究について 94

XI 純粹理性の批判の体系のうちに判断力の批判を導入するための總括的序論 100

XII 判断力批判の区分 108

第一部 直感的判断力の批判 115

第一篇 直感的判断力の分析論 116

第一章 美しいものの分析論 116

趣味判断の第一の契機——質にかんして 116

§ 1 趣味判断は直感的なものである 116

§ 2 適意が趣味判断を規定する場合には、適意にはあらゆる関心が欠けている 118

§ 3 快適なものに対する適意は関心とむすびびついている 120

§ 4 善いものに対する適意は関心とむすびあっている 122

§ 5 三種類の種別的事となる適意の比較 126

第一の契機から帰結する、美しいものの説明 128

趣味判断の第二の契機、すなわちその量にかんする契機 128

§ 6 美しいものは、概念を欠いて、普遍的な適意の客体として表象されるものである 128

§ 7 美しいものと快適なもの、および善いものとの、右に挙げた徴表をつうじた比較 130 129

§ 8 適意の普遍性は、趣味判断にあつてはたんに主観にかかわるものとして表象される 133

§ 9 趣味判断においては快の感情が対象の判定に先だつたのか、

あるいは後者が前者に先だつたのか、という問いの探究 138

第二の契機から帰結する、美しいものの解明 142

趣味判断の第三の契機、すなわち趣味判断にあつて考慮される、目的の関係にしたがう契機

§ 10 合目的性一般をめぐつて 142

§ 11 趣味判断は、対象の（あるいは対象の表象様式の）合目的性の形式以外の

なものも根底に有してはいない 143

§ 12 趣味判断はア・プリアリな根拠にもとづいて 144

§ 13 純粹な趣味判断は魅力や感動には依存しない 146

§ 14 実例による説明 147

§ 15 趣味判断は完全性の概念にはまったく依存するものではない 152

§ 16 ある対象をなんらかの規定された概念の条件のもとで美しいと宣言する場合、

その趣味判断は純粹ではない 156

§ 17 美の理想について 160

第三の契機から帰結する、美しいものの解明 167

趣味判断の第四の契機、すなわち対象に対する適意の様相にかんする契機 168

§ 18 趣味判断の様相とはなにか 168

§ 19 私たちが趣味判断に附与する主観的必然性は条件づけられている 169

§ 20 趣味判断が主張する必然性の条件とは或る共通感官の理念である 169

§ 21 はたして共通感官は根拠をもつて前提とされうか 170

§ 22 普遍的な同意の必然性は、それが趣味判断において思考される場合には主観的必然性であり、

この主観的必然性が共通感官の前提のもとで客観的なものとして表象される 171

第四の契機から帰結する、美しいものの解明 173

分析論第一章に対する一般的な註解 173

第二章 崇高なもの分析論 179

§ 23 美しいものの判定能力から崇高なもの判定能力への移りゆき 179

A § 24 崇高なものの感情を探究するさいの区分について 183

数学的に崇高なものについて 184

§ 25 崇高なものという名称の解明 184

§ 26 崇高なものの理念のために必要とされる、自然事物の大きさの評価について 189

§ 27 崇高なものの判定にさいしての適意の質について 199

B 自然の力学的に崇高なものについて 204

§ 28 勢力としての自然について 204

§ 29 自然における崇高なものにかんする判断の様相について 210

直感的な反省的判断の究明に対する一般的註解 214

純粹な直感的判断の演繹 233

§ 30 自然の対象についての直感的判断の演繹は、私たちが自然において崇高と名づけるものに向けられる必要はなく、ただ美しいものに対してだけ向けられればよい 233

趣味判断の演繹の方法について 236

§ 31 趣味判断の第一に特有なありかた 237

§ 32 趣味判断の第二に特有なありかた 241

§ 33 趣味についてはそのような客観的原理も可能ではない 244

§ 34 趣味の原理とは判断力一般の主観的原理である 245

§ 35 趣味判断の演繹という課題について 247

§ 36 ながいながらも、ある対象にかんする趣味判断にあつてア・プリオリに主張されるか 249

§ 37 趣味判断の演繹 250

註解 251

§ 38 感覚の伝達可能性について 253

§ 39 共通感官 (*sensus communis*) のひとつの種類としての趣味について 255

§ 40 美しいものに対する経験的な関心について 264

§ 41 美しいものに対する知性的な関心について 260

§ 42 美しいものに対する知性的な関心について 264

第二篇

直感的判断力の弁証論 327

§ 43 技巧一般について 272

§ 44 芸術について 275

§ 45 芸術とは、それが同時に自然であるように見えるかぎりでの一箇の技巧である 277

§ 46 芸術とは天才の技巧である 279

§ 47 天才にかなする右の定義の解明と確証 281

§ 48 天才と趣味との関係について 285

§ 49 天才をかたちづくるころの能力について 288

§ 50 芸術の産物における趣味と天才の結合について 298

§ 51 芸術の区分について 300

§ 52 一箇同一の産物においていくつかの芸術が結合されることについて 308

§ 53 芸術の有する直感的価値をたがいに比較すること 310

§ 54 註解 317

§ 55 327

§ 56 趣味のアンチノミーの提示 328

§ 57 趣味のアンチノミーの解決 330

註解一

註解二

§ 58 直感的判断力における唯一の原理としての、自然および芸術の合目的性にかんする觀念論について 341

§ 59 倫理性の象徴としての美について 348

§ 60 附録 趣味の方法論について 353

第二部 目的論的判断力の批判

357

§ 61 自然の客観的合目的性について

358

第一篇 目的論的判断力の分析論

362

§ 62 実質的な客観的合目的性とは区別される、たんに形式的な客観的合目的性について 362

§ 63 内の合目的性から区別される、自然の相対的合目的性について 368

§ 64 自然目的としての事物に特有な性格について 373

§ 65 自然目的としての事物とは有機的存在者である 378

§ 66 有機的存在者における内の合目的性を判定するさいの原理について 384

§ 67 目的の体系としての自然一般を目的論的に判定するさいの原理について 386

§ 68 自然科学にとって内の原理としての、目的論の原理について 392

第二篇 目的論的判断力の弁証論

397

§ 69 判断力のアンチノミーとはなにか 397

§ 70 このアンチノミーの提示 398

§ 71 右に挙げたアンチノミーを解決するための準備 402

§ 72 自然の合目的性をめぐる各種の体系について 403

§ 73 右に挙げたいずれの体系も、それが申したてているところを成しとげていない 408

§ 74 自然の技術という概念を教説的に論じることが不可能である理由は、

自然目的というものが解明されない点にある 412

§ 75 自然の客観的合目的性の概念は、反省的判断力に対する理性の批判的原理である 416

§ 76 註解 420

§ 77 自然目的という概念を私たちに對して可能とする、人間悟性に特有なありかたについて 427

§ 78 物質の一般的なメカニズムの原理と、自然の技術における目的論的な原理との結合について 434

附録 目的論的判断力の方法論 444

- § 79 目的論は自然学にぞくするものとして論じられなければならないか 444
- § 80 事物が自然目的として説明されるにさいして、メカニズムの原理が
目的論的原理のもとに必然的に従属することについて 446
- § 81 自然産物としての或る自然目的の説明にあつては、
メカニズムが目的論的原理に随伴することについて 452
- § 82 有機的存在者の有する外的関係における目的論的体系について 457
- § 83 一箇の目的論的体系としての自然が有する最終的な目的について 464
- § 84 世界の現存在の、すなわち創造そのものの究極的目的について 471
- § 85 自然神学について
- § 86 倫理神学について 484 475
- 註解 489
- § 87 神の現存在の道德的証明について 492
- § 88 道德的証明の妥当性の制限 502
- 註解 510
- § 89 道德的論証の効用について 512
- § 90 神の現存在をめぐる目的論的な証明における、「真とみなすこと」の種類について 515
- § 91 実践的な信仰をつうじて真とみなすことの種類について 524

目的論に対する一般的註解 537

訳者あとがき 555

人名索引

560

事項索引

590